

2012 年度 在宅医療助成（後期）完了報告書

臨終に居合わせなかった家族らの
「虫の知らせ」体験とその心理的効果

申請者（研究代表者）

吐師秀典（プライマリヘルスケア研究所 研究員）
東京都墨田区向島 2 丁目 10-5 第 5 安井ビル 1F
訪問看護ステーションみけ内
電話 03-3626-2317 FAX 03-3626-2318

共同研究者

吐師友美（プライマリヘルスケア研究所 研究員）
油井和徳（プライマリヘルスケア研究所 研究員）
椎名恵美子（訪問看護ステーションみけ 看護師）

提出年月日 2014 年 2 月 28 日

要 旨

本研究では、家族や親しい人の臨終に居合わせなかった経験がある人にアンケート調査を行い、「虫の知らせ」の体験の有無と、死別した方との関係、虫の知らせ体験に対する思いなどを調べ、その後インタビューによって「虫の知らせ」体験の内容、「虫の知らせ」体験が自身に与えた影響など聴き取り、体験者にどのような心理的効果をもたらすかを明らかにしようと試みた。

アンケート調査の回答数は207であり、インタビュー調査は10名に対して行った。結果、家族や親しい友人などとの死別を経験した人の「虫の知らせ」体験者は42.0%であった。そのうち「虫の知らせ」体験に対して「よかった」と思った者は63.2%、「よくなかった」と思った者は4.6%であった。「よかった」と思った者の理由は、「故人とのつながり」を感じたというものが多く、「虫の知らせ」体験には、死別という衝撃的な事象に対して、自身によるグリーフケア的心理効果がある可能性が考えられる。

Key words : 虫の知らせ、グリーフケア

1. はじめに

介護保険制度の普及とともに、在宅で臨終を迎える方が少しずつ増えている。病院などの医療機関ではなく、できることならば慣れ親しんだ我が家などで人生を締めくくりたいという人や、そう願う家族が増えてきているのであろう。厚生労働省の調べでは国民の6割が病院以外での臨終を望んでいる。しかし、2025年までに在宅での看取りを全体の4割に引き上げようとしていながら、実際は1割程度という現実がある。この国において「死」は、未だ本人にとっても家族にとっても望む形で迎えられていないことが多いのであろう。

そんな在宅での臨終について、宮城県で在宅医療を行っている医師のグループが、興味深い調査研究を報告した¹⁾。それは、在宅医療を受け死期が近づいた人が、既に他界した親など、周囲の人や他人には見えない人に会う「お迎え現象」というものを、42.3%の人が体験しているというものである。この体験をした人は、死の恐怖や不安が和らいで、穏やかに死を迎えることが多いとの報告もなされている。これは日本の文化的現象ではなく、西欧における研究者キューブラ・ロスも言及している²⁾。

「お迎え現象」は、医学的に見ても生理現象の一つとして考えられ、ナチュラル・ダイイング・プロセスの一環として説明ができる。食事量、飲水量の低下により、血圧低下、嚥下不全、そして脱水による脳循環量低下となり、ある種の幻視体験をすると考えられる。特に在宅医療では、病院や施設のような医療の監視下に置かれた環境とは違い、このナチュラル・ダイイング・プロセスを踏む環境があり、「お迎え現象」を体験し穏やかな死に繋

がっていると考えられる。

翻って、家族や親しい人を亡くした人たちが、その死を穏やかに受け止めるのに関わるような現象や体験はないものかと考えると、「虫の知らせ」という現象が思い浮かぶ。「虫の知らせ」とは、良くないことが起きる予感・予知を指す慣用表現であるが、「お迎え現象」と同様に、「死」の前後に起こる摩訶不思議な現象として多くの体験談を耳にするものである。「虫の知らせ」は、好ましくない結果があった後に、その事象があった直前もしくは同時に自分に起きた予知的体験と言えよいであろうか。例えば、「なんだか普段しないような胸騒ぎがする」と思ったが大して気にも留めずにいたら、その後に「祖父さんが他界した」という知らせが届き、振り返ると胸騒ぎがした時間位に他界していた、といったものである。この「虫の知らせ」も「お迎え現象」同様に、日本の文化的現象ではなく、心理学者のユングもシンクロニシティとして説明している^{3) 4)}。実際、すべての「虫の知らせ」がシンクロニシティであるかは別として、「虫の知らせ」を体験した人は、臨終の場面に居合わせなくても、故人と何らかの繋がりを感じ、悲嘆や後悔を和らげるようなものとなっているのではないかと考えられるのである。

在宅医療、特に訪問看護においては、利用者の死後もその家族と同じ地域内で会い、故人について話をするなどグリーフケアにあたる場面も少なくない。家族や親しい人が「虫の知らせ」を故人との繋がりを感じ、悲嘆や後悔を和らげる精神的防衛機能として体験しているのであれば、グリーフケアに大いに役立つものであると考えられる。

2. 用語の定義

本研究で用いる用語は、以下のように定義する。

虫の知らせ：一般的に用いられている広義の意味では、「よくないことが起こりそうであると感ずること」とあるが、本研究においては、特に「死別に際して予期的に感ずたこと」として用いる。

3. 研究目的

本研究では、家族や親しい人の臨終に居合わせなかった経験がある人にアンケート調査を行い、「虫の知らせ」の体験の有無と、死別した方との関係、虫の知らせ体験に対する思いなどを調べ、その後インタビューによって「虫の知らせ」体験の内容、「虫の知らせ」体験が自身に与えた影響など聴き取り、体験者にどのような心理的効果をもたらすかを明らかにするのを目的とする。

4. 研究方法

1) 予備調査

アンケート調査に先行し、予備調査として「虫の知らせ」体験者に聞き取り(インタビュー)調査を行った。インタビューは5名に実施。アンケート用紙案のブラッシュアップとアンケート調査実施要領に役立てることを目的とした。聞き取りは半構造的面接の形態で行った。予備調査結果を検討し、下記のアンケート調査となった。

2) アンケート調査(本調査)

本調査は、質問紙によるアンケート調査によって行った。質問紙の作成にあたっては、前述の予備調査結果をもとに作成した。アンケートでは、「虫の知らせ」の体験の有無、故人との続柄、虫の知らせを体験してどう感じたかを集計し、それらの相関分析を行い、量的結果を得た。

調査対象者及び対象者数は以下のとおりとする。

(1) 調査対象

予備調査以前に仮に対象者を『研究者が訪問看護していた利用者の家族や親しい人、本研究に賛同して頂いた訪問看護ステーション及び在宅医療を実施する医療機関(クリニック、診療所など)を利用されていた人の家族や親しい人で、故人が亡くなられてから半年以上を経過し2年未満の人を対象とする』としていたが、「虫の知らせ」体験者に対する予備調査によって、①体験はいつまでも鮮明に記憶される旨、体験期間を2年前にする根拠が不明であること、②家族や親しい人は誰でもいるので「訪問看護していた利用者の家族や親しい人」という限定には枠組みの根拠がないことが考えられた。そこで、下記のように研究対象を改めた。

研究者が訪問看護している利用者及び訪問看護していた利用者の家族や親しい人、本研究に賛同して頂いた訪問看護ステーション及び在宅医療・地域ケアを実施する機関(クリニック、診療所、ヘルパーステーションなど)を利用されている人及び利用していた人の家族や親しい人で、また、賛同して頂いた訪問看護ステーション及び在宅医療・地域ケアを実施する機関(クリニック、診療所、ヘルパーステーションなど)のスタッフで、家族や親しい人との死別の経験があり、故人が亡くなられてから半年以上を経過し、概ね記憶が定かである人を対象とした。

(2) 対象者数

有意水準は、社会科学で用いる0.1%とし、アンケートによる「虫の知らせ」の体験者が50%と推定して、予定対象者の数は200人とした。アンケートの配布は回収率を30%と推定し賛同して頂いた機関をとおして合計500部を郵送した。印刷および郵送は業者に委託した。また、研究者の直接依頼によるアンケートも行った(71部)。回答数は207であり、回収率は36.3%であった。

3) インタビュー調査

「虫の知らせ」体験の内容、「虫の知らせ」が自身に与えた影響などをインタビューによって調査した。インタビューは、あらかじめ作成したインタビューガイドに沿って半構造的面接として行った。収集したデータをインタビューガイドによるカテゴリーによって整理し、量的データとの関係性を検証した。インタビューの所要時間は30分、最も長いもので45分程度であった。

調査対象者及び対象者数は、アンケート調査時に、「虫の知らせ」を体験したと回答しインタビューへの同意を取れた者10名に実施した。

5. 研究期間

本研究の研究期間は、平成25年3月から平成26年2月であった。アンケート及びインタビュー調査の実施期間は、平成25年10月から平成26年1月であった。

6. 倫理的配慮

アンケート調査については賛同いただいた機関の責任者に、インタビューについては対象者に、それぞれ口頭(電話も含む)及び文書によって説明し、同意書を得た。アンケート用紙は、基本的に自記式無記名としたことによる自動的匿名性に加え、回答の任意性を保証した。また、アンケートの回答を以て本調査に同意したものと判断する旨を用紙に記載した。本研究の各調査における人権の保護、法令等の遵守に関する具体的な配慮は以下の通りである。

1) 研究への参加・協力の拒否(一部・全部)により不利益が被らないこと

アンケート及びインタビューへの回答の拒否や途中での参加拒否の権利の保障、不参加による不利益はないことを保証した。

2) プライバシーの保護と個人情報の取り扱いについて

得られた情報は、個人が特定されないようにし、収集したデータや関連資料は鍵のかかる保管庫やキャビネットに厳重に保管し管理し、データを閲覧できる人を、研究代表者及び共同研究者のみにした。研究で知りえた個人情報は、法律の規定がある場合などの例外を除き、明示した研究目的以外には使用しないものとした。

3) 資料の保存方法について

個人情報は研究代表者が管理し、その取扱いは研究代表者及び共同研究者のみとした。個人情報に関わるすべての電子データはパスワードにより保護し厳重に管理し、研究終了後はデータを抹消し破棄した。

- 4) 研究参加により起こりうる危険並びに不快な状態とそれが生じた場合の対処方法
特にインタビューにおいては、内容が個人の体験に関わるものであるため、回答中につらい体験を想起し負担を感じるがあったら一旦中止し、対象者の精神的・身体的な負担がかからないように配慮した。

7. 結果

1) アンケート調査による結果

(1) 「虫の知らせ」体験の有無

「虫の知らせ」の体験をしたと回答した人は、207名中87名であった。比率は42.0%であった。(調査資料1の表1参照)

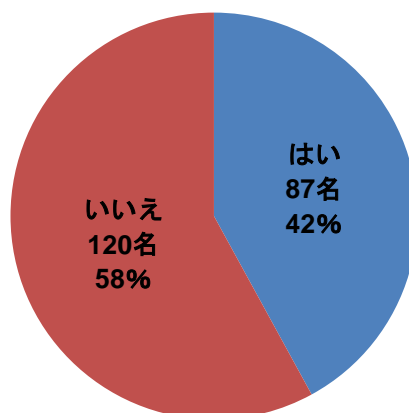


図1. 「虫の知らせ」体験の有無

(2) 死別した人(故人)との関係

「虫の知らせ」の体験をしたと回答した人に、死別した人(故人)との関係を回答してもらったところ、配偶者は3名(3.4%)、親は24名(27.6%)、祖父母は16名(18.4%)、子は0名(0%)、その他の親戚は14名(16.1%)、親しい友人は10名(11.5%)、その他は19名(21.8%)、無回答は1名(1.2%)であった。親と回答した人が最も多かった。親族(配偶者、親、祖父母、子、その他の親戚)の合計は57名であり、全体の65.5%であった。(調査資料1の表2参照)

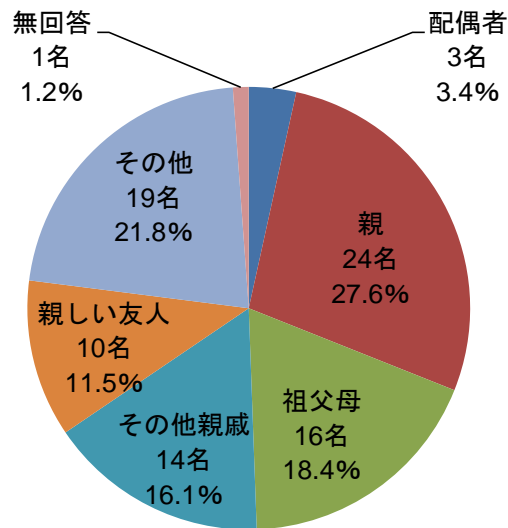


図2. 死別した人(故人)との関係

(3) 「虫の知らせ」体験に対する思い (心理的効果)

「虫の知らせ」の体験をしたと回答した人に、「虫の知らせ」体験に対する思いを「よかった」、「よくなかった」、「わからない」の選択肢で回答してもらったところ、「よかった」は55名(63.2%)、「よくなかった」は4名(4.6%)、「わからない」は27名(31.0%)、無回答は1名(1.2%)であった。(調査資料1の表4参照)

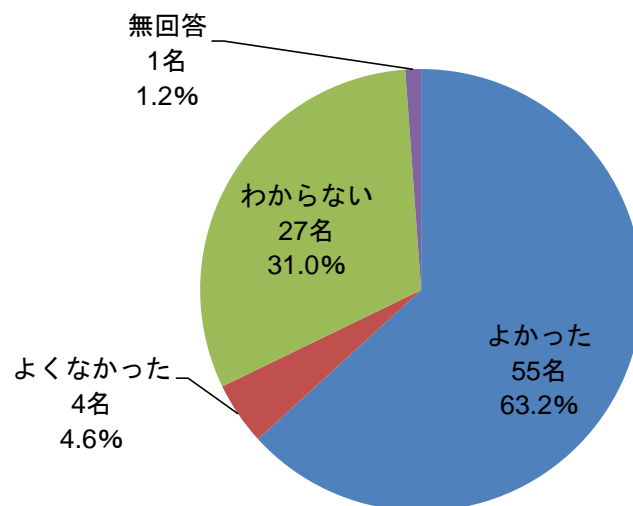


図3. 「虫の知らせ」体験に対する思い (心理的効果)

(4) 死別した人(故人)との関係と「虫の知らせ」体験に対する思いのクロス集計

死別した人(故人)との関係と「虫の知らせ」体験に対する思いについて、クロス集計によって相関性を見たところ、「よかった」と回答した人は、配偶者は3名(100%)、親は14名(58.3%)、祖父母は9名(56.3%)、子は0名(0%)、その他の親戚は7名(50.0%)、親しい友人は8名(80.0%)、その他は13名(68.4%)、無回答は1名(100%)であり、回答がなかった「子」以外のすべての項目で50%を超えていた。(調査資料1の表5①及び②参照)

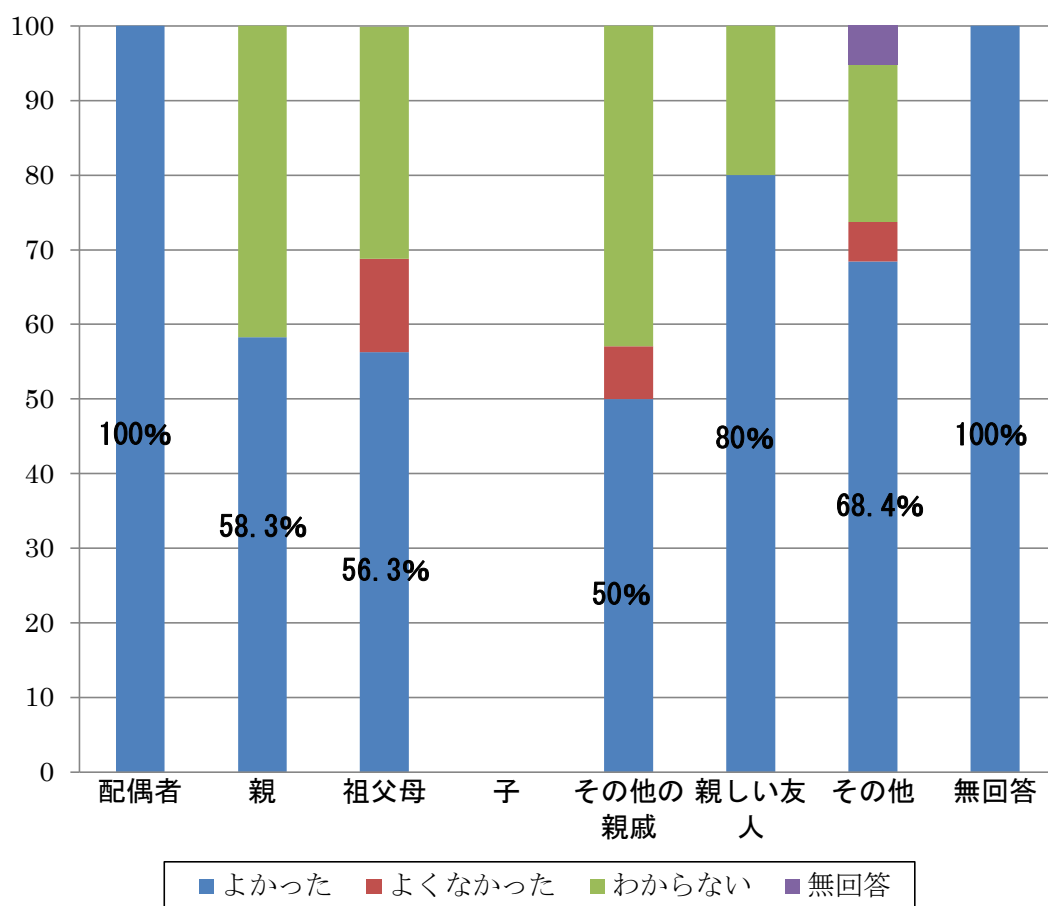


図4. 死別した人(故人)との関係と「虫の知らせ」体験に対する思いのクロス集計

2) インタビュー調査によるデータの分析結果 (調査資料2参照)

(1) 故人の登場の有無

「虫の知らせ」の体験内容を聞き取る中で、『故人が登場する場合』(6例)と『故人が登場しない場合』(4例)があった。『故人が登場する場合』にも、故人が亡くなっているのに姿を見たり声を聞いたりする幻覚的体験(3例)と、亡くなる少し前の故人の様子や雰囲気への違和的体験(3例)があった。

(2) 体験した時期について

「虫の知らせ」体験をした人は、死別した人(故人)が亡くなる前、亡くなった時(亡くなった日)、亡くなった後のすべての時期での体験事例が聞き取れた。

(3) 体験についてどう感じたかの理由

「虫の知らせ」体験について「よかった」と回答した人の理由は、「知らせてくれたから」、「伝えてくれたから」、「故人とのつながりを感じたから」であった。「悲しさを和らげてくれるものであった」との回答もあった。「わからない」と回答した人の理由は、「ただ教えてくれたのだと思う」であった。今回のインタビューでは「よくなかった」と回答した人の聞き取りへの同意は取れなかったため、その理由についてのデータは得られなかった。

8. 考察

本研究では「虫の知らせ」の体験者は42.0%であった。イアン・スティーヴンソンがその著書で報告した過去事例のレビュー⁵⁾によると、「虫の知らせ」の体験者は、アメリカ、ドイツ、イギリス、インドの調査でも15~32%であった。しかし、これらの調査は、死別にまつわるものだけでなく、「よくないことが起こりそうであると感じること」という一般的にいわれる広義の「虫の知らせ」についての調査であったため単純比較はできない。本研究の比率の高さについては、本邦の文化的な要因なども考えられるが、超感覚的知覚(ESP)であるか否かの検証は目的としていないため、体験者自身が「虫の知らせ」と感じたものすべてをn(対象数)としていることも関係していると考えられる。インタビューによる調査では、死別した人(故人)と「虫の知らせ」の体験内容が漠然としているものもあった。例えば事例Hでは、「友人の母が入院しているとのことで見舞いにいった。親しい友人でいつも遊んでいた。友人の母は見舞いに来たことを大そう喜んでくれていた。一週間くらいして、家の窓をたたく音がした。何度も聞こえたが誰もいない。友人から連絡が入り、母がなくなると聞いた。友人は見舞いに一緒に行ってくれてありがとうと言ってくれた」とある。この事例では、「窓をたたく音」と「友人の母の死」は、同時性以外の関係性は見つけにくい。つまり、明確には言えないが、体験者が「虫の知らせ」だと思っているだけのものもあると考えられる。

また、「虫の知らせ」体験に対する思いについては、63.2%が「よかった」、4.6%が「よくなかった」と回答している。『死別した人(故人)との関係』とのクロス集計の結果でも、すべてにおいて「よかった」と回答した人が50%を超え、「よくなかった」と回答した人はもっとも高いものでも祖父母の12.5%であった。「虫の知らせ」の体験者の多くはその体験を肯定的に捉えていることが分かる。インタビューによる調査での「よかった」理由をまとめると、故人とのつながりを感じているからと言える。

本研究をとおして考えられることは、一般的に考えられているよりも「虫の知らせ」の体験者は多く、またそれは「虫の知らせ」があったと“思いたい人”も多いということである。その結果、「虫の知らせ」体験を「よかった」と思っている人が多くなっていると考えられる。本研究では、何故「虫の知らせ」があったと思いたいのかは調査できていないが、インタビュー調査から見える「故人とのつながり」を求めていることが理由であるとすれば、研究者が仮説していた、死別という衝撃的な事象に対して、自身によるグリーフケア的心理効果がある可能性も考えられた。

インタビュー調査は10名であったが、「よかった」もしくは「わからない」と回答した人(82名)のうち38名がインタビューへの参加協力に同意する旨の署名をしてくださったことや、インタビューを終えた後、もっと詳しく話したいと言った方が多かったことを考えると、「虫の知らせ」の体験だけでなく、その体験を語ることを望んでいるとも考えられる。そういった意味では、対人援助職が故人の家族らのグリーフケアにあたる時、「虫の知らせ」体験談へのかかわりが有意的なものとなる可能性はあると考えられた。

9. 終わりに

本研究では、「虫の知らせ」の体験者がどのくらいの比率があり、また体験者が択一的にどう感じたかを調査したにとどまっている。体験者の属性などによる分類は行っていない。また、インタビューにおけるサンプル的な内容の分析と紹介も加えたが、質的に内容を深く解明していくものには至っていない。

本研究は、基礎的研究として意義はあると思えるが、今後母数を大きくし、属性による分類を加えたアンケート調査の実施、そして「虫の知らせ」体験の心理的効果をより深く解明するためにも質的帰納的研究法を用いた研究などをしていく必要があると考える。

10. 謝辞

本研究に助成いただきました公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団に、心より感謝申し上げます。また、このアンケート調査、インタビュー調査及び研究に協力していただきました医療機関、訪問看護ステーション、その他の地域ケア活動事業所の管理者や職員の皆さま、そして利用者とその家族の皆様に深く感謝致します。

引用文献

- 1) 諸岡了介、相澤出、田代志門、岡部健 「現代の看取りにおける〈お迎え〉体験の語り—在宅ホスピス遺族アンケートから」 死生学研究 (9), pp 223-205, 2008-03
- 2) キューブラ・ロス (川口正吉 訳) 「死ぬ瞬間—死にゆく人々との対話—」 読売新聞社 1971-04
- 3) イラ・プロゴフ (河合隼雄、河合幹雄 訳) 「ユング心理学選書⑫ ユングと共時性」 創元社 1987-09
- 4) F・D・ピート (管啓次郎 訳) 「シンクロニシティ」 朝日出版社 1989-07
- 5) イアン・スティーヴンソン (笠原敏雄 訳) 「虫の知らせの科学」 叢文社 1981-07

参考文献

- 6) 松村ちづか、筑後幸恵 「訪問看護師の在宅での看取りに関する価値観」 埼玉県立大学紀要 vol7, pp35-41, 2005
- 7) 伊藤幸郎 「死をみとる医療と医学教育」 産業医科大学雑誌 3(4), pp459-468, 1981
- 8) 竹内真帆 「グリーフケア (特集 根拠に基づいた看取りのケア)」 がん看護 18(7), pp727-729, 2013-11
- 9) クスマノ・ジェリー 「グリーフケア」 上智大学心理学年報 (37), pp1-6, 2013-03
- 10) 太田尚子 「どう接すればいいの? 悲嘆にくれる両親に: グリーフケア (特集 第3回 羽衣セミナー)」 静岡県母性衛生学会誌 3(1), pp77-80, 2013
- 11) 高橋聡美 「グリーフケアの現状と課題: 大切な人を亡くした人をどう支えるか」 心と社会 44(1), P82-88, 2013
- 12) 坂口幸弘 「高齢者の死別体験とグリーフケア (特集 高齢社会で生きるということ)」 月報司法書士 (488), P 8-13, 2012-10
- 13) 船木祝 「家族等の死についての哲学的考察: 人間関係から見たグリーフケア」 人体科学 21(1), P37-45, 2012-06
- 14) 佐々木恵雲 「死とは—新しい概念としての「関係性の死」の意義—」 藍野学院紀要 23, pp1-16, 2009

資料目次

調査資料 1. アンケート調査集計データ	p13
表 1. 「虫の知らせ」体験の有無	
表 2. 「虫の知らせ」体験があった対象の内訳と比率及び心理的効果	
表 3. その他の内訳	
表 4. 「虫の知らせ」体験に対する思い(心理的効果)	
表 5. 死別した人(故人)との関係と「虫の知らせ」体験に対する思い(心理的効果) のクロス集計	
①実数(人数)によるクロス集計	
②比率(%)によるクロス集計	
調査資料 2. インタビュー調査によるデータ一覧表	p14
添付資料 1. アンケート用紙	p15
添付資料 2. インタビューガイド	p16
添付資料 3. 研究説明書(アンケート用)	p17
添付資料 4. 研究説明書(インタビュー用)	p19
添付資料 5. 施設及び機関責任者用依頼書	p21
添付資料 6. 施設及び機関責任者同意書	p22
添付資料 7. 協力同意書(インタビュー用)	p23
添付資料 8. 協力撤回書(共通)	p24

調査資料 1. アンケート調査集計データ

	はい	いいえ	合計
実数	87	120	207
比率	42	58	100

	配偶者	親	祖父母	子	その他の親戚	親しい友人	その他	無回答	合計	比率
実数	3	24	16	0	14	10	19	1	87	100
比率	3.4	27.6	18.4	0	16.1	11.5	21.8	1.2	100	-
よかった	3	14	9	0	7	8	13	1	55	63.2
よくなかった	0	0	2	0	1	0	1	0	4	4.6
わからない	0	10	5	0	6	2	4	0	27	31
無回答	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1.2
よかった比率	100	58.3	56.3	0	50	80	68.4	100		
よくなかった比率	0	0	12.5	0	7.1	0	5.3	0		
わからない比率	0	41.7	31.3	0	42.9	20	21.1	0		

ペット	1
友人の親	1
娘の友人	1
知人	11
無回答	5
合計	19

	回答数(人)	比率(%)
よかった	55	63.2
よくなかった	4	4.6
わからない	27	31
無回答	1	1.2
合計	87	100

表5. 死別した人(故人)との関係と「虫の知らせ」体験に対する思い(心理的効果)のクロス集計

①実数(人数)によるクロス集計

	配偶者	親	祖父母	子	その他の親戚	親しい友人	その他	無回答	合計
よかった	3	14	9	0	7	8	13	1	55
よくなかった	0	0	2	0	1	0	1	0	4
わからない	0	10	5	0	6	2	4	0	27
無回答	0	0	0	0	0	0	1	0	1

②比率によるクロス集計

	配偶者	親	祖父母	子	その他の親戚	親しい友人	その他	無回答
よかった	100	58.3	56.3	0	50	80	68.4	100
よくなかった	0	0	12.5	0	7.1	0	5.3	0
わからない	0	41.7	31.1	0	42.9	20	21.1	0
無回答	0	0	0	0	0	0	5.3	0

調査資料2. インタビュー調査によるデータ一覧表

事例	虫の知らせと思われる体験の内容		故人との関係・親密性について		虫の知らせ体験をどのように感じたか	
	どのような体験だったか	いつ頃体験したか	続柄	生前の親密度	体験したことをどう感じているか	良かった(良くなかった)のであればどうして
A	金縛り体験。ある日、夜中寝ていたら階段を上ってくる足音が聞えた。夫も聞いていて誰か上がってきたかと確認したが誰も来なかった。しばらくするとまた足音がして、今度は男性が部屋に入ってきて自分の上に乗ってきて金縛りのように体が動かなくなった。男性の顔ははっきり覚えていなかった。半年後、友人に年賀状を送ったが返ってこなかったので気にしていたら、ちょっとして連絡があり半年前に亡くなったと聞いた。聞いたときすぐにあのときの金縛りのときの男性がそうだったと思った。体験した日は8月15日のお盆だったので日にも覚えていて、ちょうどその日に他界されたと聞いた。	亡くなった日に体験した。知ったのは半年後のこと。	親しい友人	近所に住んでいたが引越して遠くへ。その後長期間会えていなかった。近所に住んでいた頃は家族ぐるみの親しい中だった。	よかった	教えてくれたと思ったから。そして何か伝えたいのだったと思った。いつもそうだった「虫の知らせ」体験のようなものを体験しているのでもっと不思議ではなく誰にでもあると思っていた。
B	いつもと違って見えた。20年以上通っている歯医者さん。いつものように治療に行ったら、同じ人なのにいつもと違うように見えた。この人は亡くなってしまうのではと思える感じがしたのだが、そんな非科学的なことで、しかも決して話しても良く取られない話なので誰にも話さないでいたら、二日後に亡くなってしまった。持病があったわけでもなく急逝だった。	亡くなる二日ほど前	その他、知人(長い付き合いの歯医者)	20年来の親しい歯医者さん。信頼していた。	よかった	相手が自分に亡くなることを伝えようと思っていたと思えたから。
C	写真を飾っていたのだが、その写真立てが突然倒れた。その日に、故人のご家族から電話が入り亡くなったと聞いた。	亡くなった当日。	その他、知人(職場のおかみさん)	大変お世話になったおかみさんで、とても信頼していたしかわいがってもらっていた。	わからない	ただ、教えてくれたのだと思う。
D	たまたま電車で祖母の住んでいる駅を通過するとき、突然その駅で降りたくなった。降りる用事も何もなかったのだが、最近会ってなかったので何となく祖母に会いたくなったのだと思う。商店を営んでいたので近くまで来て、祖母の元気な姿を見たら満足してそのまま駅に戻って電車に乗った。その後2・3日後に祖母の急逝の知らせが届いた。	亡くなる2・3日前	祖母	小さい頃は週末にはいつも遊んでもらっていた。大きくなってからは祖母の近所に住む他の孫に気を使って訪ねるのを控えていた。	よかった	しばらくしてから思い返して悲しさを和らげてくれるものであった。慰めになった。最期の姿を目に焼き付けられてよかった。
E	故人は登場しなかった。よく一緒に話していた処で本人らしき人影を感じたのだが、誰もいなかった。その数日後に亡くなったと知った。	亡くなる数日前	その他、知人	週に1回は会う相手だった。仕事上でかかわる相手だった。	よかった	知的障がいの人で、どんな感情でいるのかいつも分かり切れずもしかしたら嫌われているのかも思っていた。それでも会いに来てくれたと思えたからうれしかった。
F	ある日、大通りの反対側の歩道を歩いているのを見た。妙に明るく見え本人だとはっきりわかった。いつもなら声かけるのだが、何となく声を掛けなかった。亡くなった2日後に内縁の夫から連絡がきた。街で見かけたときには亡くなった後だと知った。	亡くなった後のこと。	その他、知人(8年以上の付き合いの知人)	なかなか会えなくなってからも季節ごとに花など持ってきてくれていた。	よかった	会いに来てくれたと思えたからうれしかった。故人とのつながりを感じた。でも悲しいのは悲しくてそれが和らぎはしなかった。
G	夜に階段の方から足音が聞こえてきた。電気をつけようとしたらつかない。夫も起きてきてつけようとしたがつかない。気持ち悪くて二人でなんだろうと話していた。翌日のあさ、電気を夫が直そうとしたら異常はなくなつた。そうこうしていると祖母が危篤だとの電話が入った。そのまま病院に行ったが話せないまま亡くなった。妹の話だと妹のところでも同じようなことがあった。	危篤になってから(亡くなる少し前)	祖母	子どもの頃は親の用事などがあると一ヶ月くらい預けられおばあちゃん子として育ったと思っている。結婚後はあまりあつていなかった。	よかった	悪い気はしない。自分たちの新居も知らなかったので会いに来てくれたのだと思った。
H	友人の母が入院しているとのことで見舞いにいった。親しい友人でいつも遊んでいた。友人の母は見舞いに来たことを大そう喜んでくれた。一週間くらいして、家の窓をたたき音がした。何度も聞こえたが誰もいない。友人から連絡が入り母がなくなると聞いた。友人は見舞いに一緒に行ってくれてありがとうと言ってくれた。	亡くなった日	その他、知人(友人の親)	友人とはとても親しくそのことを亡くなった親はいつも喜んでくれていた。	よかった	おっかないという感情はなかった。娘をよろしくと伝えに来たのだと感じた。
I	その人の声が聞こえた。大学のイベントで朝から大学の中庭で準備をしていたら、校舎の方から声が聞こえた。あとで手伝うからね、少し遅くなるけどと。忙しかったので振り返らずに返事だけした。その数分後に、大学の先生が来て昨夜その人がなくなると知った。	亡くなった翌朝。知る数分前。	親しい友人	尊敬し、かけがえのない友人。	よかった	亡くなって少し経った頃から、亡くなった後も自分のことを気にかけてくれたことに感謝すると同時に、亡くなっても繋がっていると感えて悲しさが随分と和らいだ。
J	結核で病床上に就いていた母が梅の形をした甘い「クラッカー」のようなお菓子をしきりに食べたが何回も買いに行った。間もなく母が亡くなったが、その交流(食欲も含めた元気な姿)が死と結びつかなかった。その時はそのしきりに食べたことが異常とは思わなかったが、後で考えると死ぬ前の母のサインのように思えた。	亡くなる少し前	母	この時期が最も母と親密だったと思える。	よかった	後々考えて死に行く人のサインだと思えるから。

添付資料 1

臨終に居合わせなかった家族らの『虫の知らせ』体験についてのアンケート

研究代表者 吐師秀典 (プライマリヘルスケア研究所)

本研究では、家族や親しい人の臨終に居合わせなかった時の「虫の知らせ」体験の有無と、死別した方との関係、虫の知らせ体験に対する思いなどを調べ、「虫の知らせ」を経験している状況と、また体験者にどのような心理的効果をもたらすかを明らかにすることを目的と致します。アンケートで得られた情報は、個人が特定されないようにし、研究以外で使用することはありません。また研究結果は、学会で発表するか学会誌等に投稿し公表致します。

上記につきまして同意戴いた方は、質問 1～3 にお答えください。

質問 1. あなたは、臨終における「虫の知らせ」と思われる体験をしたことがありますか？

1. はい → 質問 2. 3 へおすすみください。
2. いいえ → 質問は以上です。

質問 2. 「虫の知らせ」と思われる体験をしたのは、あなたとどういう関係の人との死別の際でしたか？ (複数回答可)

1. 配偶者
2. 親
3. 祖父母
4. 子
5. その他親戚
6. 親しい友人
7. その他 ()

質問 3. 「虫の知らせ」と思われる体験をしたことをあなたはどのように感じていますか？

1. よかったと思う
2. よくなかったと思う
3. 分からない

＊＊＊アンケートは以上です。お忙しいところ御協力有り難うございました。＊＊＊

尚、当研究所では今後も家族や親しい人を亡くした方たちが、その死を穏やかに受け止めるのに関わるような現象や体験＝「虫の知らせ」についての内容、「虫の知らせ」が自身に与えた影響などの記述データを取り、それらを質的にカテゴライズし、量的データとの関係性を調査していく予定です。

この研究に際し、ヒアリング調査 (30 分程度) に御協力戴ける方は、以下にお名前等ご記載を戴きたく存じます。どうぞ宜しくお願い致します。

お名前

ご連絡先

添付資料 2

臨終に居合わせなかった家族らの『虫の知らせ』体験とその心理的効果 インタビューガイド

1. 「虫の知らせ」と思われる体験の内容

- (1) どのような体験だったか
- (2) いつごろ体験したのか

2. 故人との関係性・親密性について

- (1) 続柄
- (2) 生前の親密度

- ※個人への親近感
- ※自分にとっての大切さ

3. 「虫の知らせ」体験をどのように感じたか

- (1) 体験したことはよかったのか？ よくなかったのか？ 分からないか？
 - ※よかったのであればそれはどうしてか
 - ※よくなかったのであればそれはどうしてか
 - ※わからないのであればそれはどうしてか

添付資料 3

アンケートへのご協力を考えて下さっている方へ

アンケートご協力をお願い

プライマリヘルスケア研究所は、「臨終に居合わせなかった家族らの『虫の知らせ』体験とその心理的効果」に関する研究に取り組んでおります。

どのような研究かと言うと、「虫の知らせ」を体験した人は、臨終の場面に居合わせなくても、故人と何らかの繋がりを感じ、悲嘆や後悔を和らげるようなものとなっているのではないかということ調査するものです。

そこで、家族や親しい人の臨終に居合わせなかった経験がある方に、アンケート調査に協力いただきたいと考えています。

本研究の趣旨をご理解の上、ご協力をお願いいたしたく、以下の項目をお読みいただき、研究に参加することに同意される場合は、アンケートにご回答いただければ幸いです。

尚、この研究は、公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団の助成を受けて行っています。

記

1. 研究の目的

「虫の知らせ」の体験の有無や、その体験内容、体験による気持ちの変化などをアンケートによって調べ、「虫の知らせ」をどのような状況の時に体験し、また体験者にどのような心理的効果をもたらすのかを明らかにする。

2. 研究方法

この研究は、アンケートにお答えいただく方法で実施します。アンケートの内容は、統計的なデータとして使わせていただき、また、回答者の個人の特定はできないようにいたします。また、結果および考察の論述は、2015年2月までに行います。

3. 研究への同意確認

アンケート用紙への回答をもって、研究協力への同意が得られたもの判断させていただきます。

4. 研究への協力の自由意思

この研究への協力は、お断りになることもできます。お断りになっても不利益を被ることは一切ありません。

5. 研究への参加・協力の拒否（一部・全部）により不利益が被らないこと

この研究への協力を同意した場合であっても、いつでも途中でやめることができます。辞退する場合は、撤回書に署名をいただきます。研究の協力を取りやめることによって不利益を被ることは一切ありません。

6. プライバシーの保護と個人情報の取り扱いについて

アンケートで得られた情報は、個人が特定されないようにいたします。収集したデータや関連資料は鍵のかかる保管庫やキャビネットに厳重に保管し管理します。また、データを閲覧できる人を、研究代表者、共同研究者のみにします。研究で知りえた個人情報は、法律の規定がある場合などの例外を除き、明示した研究目的以外には利用しません。

7. 資料の保存方法について

回答いただいたアンケート用紙は、本研究以外の利用は一切いたしません。また、研究終了後は、シュレッダーにかけて破棄いたします。

8. アンケート回答により起こりうる危険並びに不快な状態とそれが生じた場合の対処方法

アンケートの内容が個人の体験に関わる内容であるため、回答中につらい体験を想起し負担を感じるがあったら、一旦アンケートを中止し、対象者の精神的・身体的な負担がかからないように配慮します。

9. 研究に参加・協力することにより期待される利益

アンケート協力者には、協力謝礼品として文房具をお渡しさせていただきます。また、直接的な利益につながるものではないかもしれませんが、「虫の知らせ」という体験が、大切な人を喪失した悲嘆に対し、それを和らげる働きを担っているとしたら、看護者を含む援助者がその体験を聞き、共有することによって、家族らのグリーフケアにつながると考えられます。

10. 研究結果の公表方法

研究結果は、2015年2月に報告書を作成した後、学会で発表するか学会誌等に投稿し公表することを考えております。

11. 研究終了後の対応

研究結果は、報告書として2015年2月以降にご希望の研究協力者にお送りします。

プライマリヘルスケア研究所 吐師(はし)秀典

【連絡先】

〒131-0033 東京都墨田区向島 2-10-5

第5安井ビル1階 訪問看護ステーションみけ 内

TEL: 03-3626-2317

FAX: 03-3626-2318

E-mail: paul.h@nifty.com

添付資料 4

インタビューへのご協力を申し出ていただいた方へ

インタビューご協力をお願い

プライマリヘルスケア研究所は、「臨終に居合わせなかった家族らの『虫の知らせ』体験とその心理的効果」に関する研究に取り組んでおります。

どのような研究かと言うと、「虫の知らせ」を体験した人は、臨終の場面に居合わせなくても、故人と何らかの繋がりを感じ、悲嘆や後悔を和らげるようなものとなっているのではないかということ調査するものです。

そこで、以前アンケート調査に協力いただいた方の中で、その後のインタビュー調査への協力を申し出ていただいた方にインタビューをお願いをいたしたいと思っております。

本研究の趣旨をご理解の上、ご協力をお願いいたしたく、以下の項目をお読みいただき、研究に参加することに同意される場合は、ご協力いただければ幸いです。

尚、この研究は、公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団の助成を受けて行っています。

記

1. 研究の目的

「虫の知らせ」体験の内容、体験による気持ちの変化などをインタビューによって調べ、以前行ったアンケート調査の結果と合わせ、「虫の知らせ」をどのような状況で体験し、また体験者にどのような心理的効果をもたらすのかを明らかにする。

2. 研究方法

この研究は、インタビューにお答えいただく方法で実施します。インタビューの所要時間は 30 分程度です。別紙のインタビューガイドに沿って行います。インタビューの内容は、質的なデータとして使わせていただき、また、回答者の個人の特定はできないようにいたします。また、結果および考察の論述は、2015 年 2 月までに行います。

3. 研究への協力の自由意思

この研究への協力は、お断りになることもできます。お断りになっても不利益を被ることは一切ありません。

4. 研究への参加・協力の拒否（一部・全部）により不利益が被らないこと

この研究への協力を同意した場合であっても、いつでも途中でやめることができます。辞退する場合は、撤回書に署名をいただきます。研究の協力を取りやめることによって不利益を被ることは一切ありません。

5. プライバシーの保護と個人情報の取り扱いについて

インタビューで得られた情報は、個人が特定されないようにいたします。収集したデータや関連資料

は鍵のかかる保管庫やキャビネットに厳重に保管し管理します。また、データを閲覧できる人を、研究代表者、共同研究者のみにします。研究で知りえた個人情報、法律の規定がある場合などの例外を除き、明示した研究目的以外には利用しません。

6. 資料の保存方法について

インタビューは録音させていただきたいと思いますが、録音を拒否される場合は、内容を筆記させていただきます。録音データ及び筆記したデータは、本研究以外の利用は一切いたしません。録音及び筆記させていただいたデータは、個人名が特定できないようにアルファベット等に換えます。また、研究終了後は、録音データは抹消し、文面化したデータはシュレッダーにかけて破棄いたします。

7. インタビュー時に起こりうる危険並びに不快な状態とそれが生じた場合の対処方法

インタビューの内容が個人の体験に関わる内容であるため、インタビュー中につらい体験を想起し負担を感じるがあったら、一旦インタビューを中止し、対象者の精神的・身体的な負担がかからないように配慮します。

8. 研究に参加・協力することにより期待される利益

インタビュー協力者には、協力謝礼品として文房具をお渡しさせていただきます。また、直接的な利益につながるものではないかもしれませんが、「虫の知らせ」という体験が、大切な人を喪失した悲嘆に対し、それを和らげる働きを担っているとしたら、看護者を含む援助者がその体験を聞き、共有することによって、家族らのグリーフケアにつながると考えられます。

9. 研究結果の公表方法

研究結果は、2015年2月に報告書を作成した後、学会で発表するか学会誌等に投稿し公表することを考えております。

10. 研究終了後の対応

研究結果は、報告書として2015年2月以降にご希望の研究協力者にお送りします。

プライマリヘルスケア研究所 吐師(はし)秀典

【連絡先】

〒131-0033 東京都墨田区向島 2-10-5

第5安井ビル1階 訪問看護ステーションみけ 内

TEL: 03-3626-2317

FAX: 03-3626-2318

E-mail: paul.h@nifty.com

平成 年 月 日

様

研究代表者 吐師秀典（プライマリヘルスケア研究所）

研究協力について（依頼）

拝啓

時下、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

日頃、当学及び当研究所の研究にあたりましては、ご高配、ご協力賜り感謝申し上げます。

現在、私たちは、『臨終に居合わせなかった家族らの「虫の知らせ」体験とその心理的効果』に関する研究を実施いたしております。つきましては、貴事業所の利用者へのアンケート及びインタビュー実施をいたしたく、またアンケート集計へのご協力をいただきたく、ご許可くださいますようお願いいたします。

敬具

記

1. 研究課題： 臨終に居合わせなかった家族らの「虫の知らせ」体験とその心理的効果
2. 研究者氏名：
研究代表者 吐師秀典（プライマリヘルスケア研究所）
吐師友美（同上）
油井和徳（同上）
椎名美恵子（訪問看護ステーションみけ）
3. 研究目的：
家族や親しい人の臨終に居合わせなかった経験がある人に調査を行い、「虫の知らせ」の体験の有無と、死別した方との関係、虫の知らせ体験に対する思いなどを調べ、「虫の知らせ」を経験している状況と、また体験者にどのような心理的効果をもたらすかを明らかにするのを目的とする。
4. 研究方法：
質問紙によるアンケート調査によって行う。また、「虫の知らせ」の内容、「虫の知らせ」が自身に与えた影響などの記述データを取り、それらを質的にカテゴライズし、量的データとの関係性を見る。研究対象は、故人が亡くなられてから半年以上を経過し2年未満の人を対象とする。対象者の数は200人程度とする。
5. 研究期間： 平成25年3月～平成26年2月
6. 調査実施期間： 平成25年10月～平成26年1月
7. 倫理的配慮： 各研究説明書に記載（別添）
8. 問い合わせ先： プライマリヘルスケア研究所 吐師(はし)秀典
〒131-0033 東京都墨田区向島2-10-5 第5安井ビル1階
訪問看護ステーションみけ 内
TEL：03-3626-2317 FAX：03-3626-2318 E-mail：paul.h@nifty.com

添付資料6

研究代表者 吐師秀典（プライマリヘルスケア研究所） 殿

臨終に居合わせなかった家族らの「虫の知らせ」体験とその心理的効果 に関する研究 アンケート及びインタビュー調査 実施協力同意書

私は、「臨終に居合わせなかった家族らの『虫の知らせ』体験とその心理的効果」に関する研究について説明文書を用いて説明を受け、研究の目的、内容、方法、期待される利益および起こりうる不快な状態などについて十分に説明を受け、以下の内容を理解しましたので、この研究に対して本事業所にて実施協力することに同意します。

説明内容

1. 研究の目的
2. 研究方法
3. 研究への協力の自由意思
4. 研究への参加・協力の拒否（一部・全部）により不利益が被らないこと
5. プライバシーの保護と個人情報の取り扱いについて
6. 資料の保存方法について
7. 研究に参加・協力することで起こりうる危険並びに不快な状態とそれが生じた場合の対処方法
8. 研究に参加・協力することにより期待される利益
9. 研究結果の公表方法
10. 研究終了後の対応

____年 ____月 ____日

署名 _____ 事業所名 _____

代表者名 _____

添付資料 7

研究代表者 吐師秀典（プライマリヘルスケア研究所） 殿

臨終に居合わせなかった家族らの『虫の知らせ』体験とその心理的効果に関する研究 インタビュー調査 協力同意書

私は、プライマリヘルスケア研究所が実施する「臨終に居合わせなかった家族らの『虫の知らせ』体験とその心理的効果」に関する研究について説明文書を用いて説明を受け、研究の目的、内容、方法、期待される利益および起こりうる不快な状態などについて十分に説明を受け、以下の内容を理解しましたので研究参加に同意します。

説明内容

1. 研究の目的
2. 研究方法
3. 研究への協力の自由意思
4. 研究への参加・協力の拒否（一部・全部）により不利益が被らないこと
5. プライバシーの保護と個人情報の取り扱いについて
6. 資料の保存方法について
7. 研究に参加・協力することで起こりうる危険並びに不快な状態とそれが生じた場合の対処方法
8. 研究に参加・協力することにより期待される利益
9. 研究結果の公表方法
10. 研究終了後の対応

____年 ____月 ____日

署名 氏名 _____

添付資料 8

研究代表者 吐師秀典（プライマリヘルスケア研究所） 殿

臨終に居合わせなかった家族らの『虫の知らせ』体験とその心理的効果に関する研究 協力撤回書

私は、プライマリヘルスケア研究所が実施する「臨終に居合わせなかった家族らの『虫の知らせ』体験とその心理的効果」に関する研究に協力することについての同意を撤回したいので、お知らせいたします。私に関する全てのデータは使用しないようお願いします。

同意撤回日： _____ 年 _____ 月 _____ 日

署名： _____